

# 本当の強さ

津山市・一宮小6年 仁木 心音



## 滴一滴

「強い」だけでなく「憎らしい」ほど強い。亡くなった日本相撲協会の北の湖理事長は現役時代、そう称された。横綱として、挑む相手をはね返し、肩をいからせて勝ち名乗りを受ける。ニコリともせず平然としている▼内心は違ったらしい。脚本家の内館牧子さんのインタビューに答え、ガッツポーズが出なかったことを打ち明けている。1976年初場所、相星のライバル輪島を下し優勝した時だ。「ハツと思っただけ抑えました」と（「おしゅれに。男」潮出版社）▼倒した相手に一度も手を貸さなかったのも「同情をかけられたようで、かわいそう」との思いやりから。怖そうな顔つきとは裏腹に温厚、誠実な人柄だったという▼「横綱は攻めるのではなく、守るためにたたかう」。ノンフィクション作家の山際淳司さんが「ある日の北の湖」という短編に書いている。後は引退しかない最高位に史上最年少の21歳2カ月で上り詰め、10年以上も地位を守った▼引退後も伝統文化の相撲を守る先頭に立った。先日、九州場所で猫だましの奇襲に出た横綱白鵬に「前代未聞」と苦言を呈したのも、横綱の品位を守ってほしいとの願いからだっただろう▼一年納めの場所もきょうが千秋楽だ。すっかりした相撲を取るこそ、一貫して「土俵の充実」を訴えた理事長への何よりの供養に違いない。 2015・11・22

2015年11月22日付 山陽新聞

「強い」だけでなく「憎らしいほど強い」。こんな書き出しに私は心が動いた。亡くなった昭和の横綱、北の湖理事長の生きざまが書かれた内容だった。

北の湖が現役時代、倒した相手に一度も手を貸さなかったことが書かれていた。テレビで相撲を観ると、勝者は敗者に手をさし出し、私はそれが人の優しさやスポーツのマナーだと思っていたが、北の湖は「同情をかけられたようでかわいそう」との思いから手を貸さなかったという。私はこれを読んで心のあり方は人それぞれ、優しさの表現もそれぞれ、手を貸すことだけが優しさや思いやりではなく、手を貸さない深い思いやりもあることを知った。

自分が勝負で負けた時はどうしてほしいだろう。例え勝負に負けても立ち上がるくらい自分の力で立ち上がった。きっと北の湖もそんな思いがあったのではないだろうか。相手のことを深く思えばこそ、手を貸さなかった北の湖は相手にきびしいのではなく、自分にきびしかったのだと思う。「肩をいからせて勝ち名乗りを受け、ニコリともせず平然としている」。勝った時も負けた時も相手を敬い、平然としていた心の中にこそ本当の強さの源があると私は思う。

学校の中でもいろんな意味で勝負がある。私はその勝負の勝敗で一喜一憂していいのだろうか。小さな事で心を乱し、平然としていられない自分がはげしく思えた。本当の強さ、相手を敬う心、そんなことにも目を向け、自分をふり返りながら私は成長しつづけてい。

本紙のコラム「滴一滴」を読み、亡くなった日本相撲協会の北の湖理事長の誠実さに共感。

## 寸評

「相手を敬う心の中にこそ強さの源がある」と自らと向き合う真摯な姿に引かれます。

(C) 山陽新聞社 無断複製・転載を禁じます。